

「いつだって、どこへだって」

寅衛 まさお

車の運転が楽しくない。

現在、仮免許を取得して一ヶ月である。親きょうだいは、「路上に出れば楽しさも分かるよ」と笑っていたが、全くの嘘である。

「以前より右折が上達しましたね。由野さん、上手くなってますよ。この調子」

教官の青山さんは目尻に皺を寄せて履修項目に判を押してくれたけど、自分ではそうも思えない。

とぼとぼと教習所を後にする。紫色の送迎バスには、笑顔でハンドルを握るねずみの絵。どうにも、親近感の湧かないマスコットキャラクターだ。運転が楽しいなんて、異星人みたいだもの、ねずみだけ。遠回しにそんな愚痴を零すと、青山さんは「免許を取って行きたい所とかはないんですか？」と気遣わしげに尋ねてくれた。しかし残念ながら、出不精の私に行きたい所なんてない。今は緊張のあまり、車窓を眺める余裕もない。

桜の葉もすっかり青くなった六月。就職のために自動車免許を取りに来た私は、憂鬱な日々を過ごしていた。理由は単純明快。私が不器用でビビリでのろまで、要するに運転に向いていないからだ。いつ事故を起こすかと、手汗でハンドルを湿らす毎日。よく教習の担当になる青山さんの朗らかさだけが、救いであった。

「あーあ、明日も教習か。あーやだ、やだ」

痛む右膝をさすりながら寝床に就くのに慣れてきた。教習中、私の右膝は常に力んで震えている。

「オートマ三九号車の方」

おや？

片手に握った配車券を見ると、そこには『AT39』の文字。呼ばれているのは私か、と声の元へ駆け寄る。丸々と小柄なシルエット。青山さんだ。良かった。地獄に仏だ。

青山さんは私の姿を認めると、柔らかく相好を崩した。

「こんばんは。由野さん」

「こんばんは。あれ？」

ふと頭上を仰ぎ見る。空は重たい濃紺に包まれていた。目を凝らすと、そこに小さな星がぼつりぼつりと浮かんでくる。こんな遅い時間に教習を受けたことはなかった。……そもそも、今は何時なのだろう？

違和感に首を傾げる私をよそに、青山さんは車へと向かう。いつも通りの点検を経て、私たちは兎にも角にも車に乗り込んだ。

「えー、こほん。今日は特別にね、由野さんの好きな所へ行こうと思えます」

「私の？ 良いんですか、そんな……」

「ドライブの楽しさを知って欲しいんですよ。訓練も兼ねてね」

膨らんだお腹の上で指を絡めながら、青山さんはつぶらな瞳でこちらをひたと見つめる。私はここらが地元だけれど、自分の運転で行ける所となると、すぐには思いつかない。しばらく黙考して

「じゃあ、博物館と、宇宙の……」

「ああ、はい！ あすこは卒検でもよく通るから、良い練習になりますよ」

ポン、と青山さんが手を打った。それを合図に、私たちの奇妙なドライブが幕を開けた。

教習所を左に出て、お馴染みの『中洲』の信号を左折する。横浜線の下を潜って、まっすぐ走る。この辺りは流石に慣れたものだ。夜の運転は不安だったが、人も車も少ない分、スムーズに走れる。もつとも、油断は禁物だが。

「この先を一六号に出ましようか」

やっぱり、そう来たか。一六号に出るには郵便局前の大きな交差点を右折しなければならぬ。でも、私は右折が大の苦手だ。タイミングも走行位置も、上手くとれない。特にあの交差点は大きいから、小回りしたり大回りしたり、いつも何かしら失敗する。いざ。右後方よし、進路変更。信号、対向車よし、ハンドルを切り過ぎ

ず……右折！

なかなか上手くいったぞ、と内心ほくそ笑んだ瞬間、私は「えええ！」と無様な悲鳴をあげていた。

夜の国道。明滅する光の海。

「ど、どうしてこんなに混んでるんでしょう？」

事故でもあったのかしら、と左右を見渡して、再び「えええ！」である。私が目を疑って思わずルームミラーを確認すると、後ろを走る車にも、人が乗っていない。「な、な、な……」

「ここらは自動車販売店が多いですからね。車も夜遊びぐらいするでしょうよ。日がな一日、整列させられているんだから」  
開いた口が塞がらない私の肩を、青山さんが優しく叩く。何か宥めているようだけど、言っている意味が理解できない。車が？ 夜遊びを？ なんで？

「さあ、由野さん。ぼんやりしていると車線変更でどんどん割り込まれちゃいますよ。この制限速度は何キロでしたっけ？」  
はっとして、ハンドルを握り直す。青山さんの言う通り、右を走っていた車が前の渋滞を避けてか私の前に入ってきた。心なしか、タイヤが弾む足取りに見える。本当に、車自体が走るのを楽しんでいるみたい。

「ろ、六〇キロです！」

「その通り。大丈夫、私の足もとに補助ブレーキがありますからね。さあさあ、こちらでも楽しいドライブですよ」

ええい、どうにでもなれ！ 私はいっになく強めにアクセルを踏んだ。

滑走路を走る飛行機の気分で一六号を駆け抜け、ほどなくして歩道橋の架かる交差点を左折した。駅の繁華街から脇道に入ったみたいのに、一気にしーんとなる。ミラーで後方を見ると、販売店から抜け出したと思しき車たちがビュンビュン夜遊びを続けていた。こちらには落ち着いて、速度を四〇キロまで落とす。青山さんは満足げに頷いた。

この先は並木道を真っ直ぐだ。昼間と違って人気がない。しかしもうすぐ小学校に差し掛かるといふ所で、青山さんが呟く。

「小学校の近くですからね。子どもの飛び出しに注意しましょう」  
「こんな時間に、子どもが？」

首を捻りつつも車を走らせる。やがて左手に宇宙科学研究所、右手に市立博物館が見えてきた。もちろん、入館できる筈もないので、手前の交差点を右折して銀河通りに入る、その瞬間。

「ストップ！」  
青山さんが補助ブレーキを踏んだ。車がギュツと止まって、体が前のめりになる。目を白黒させる私に、青山さんが右前方を指し示した。小学校側と博物館側を繋ぐ横断歩道。そこに、小さな人影があった。

「ああ、ご免なさい。気が付かなかった……」

「子どもは小さくて見えづらいですからね。横断歩道付近は重々気を付けて」  
ブレーキを固く、固く踏んだまま人影が横断するのを待つ。しか

し：子どもにしても小さな影だ。車のライトに照らされたその姿は、茶色い：：。

「お、おびのつち：：？」

「よく御存じですね」

そこにいたのは博物館のマスコットキャラクター、おびのつちであった。縄文土器の赤茶けた体に、吊り上がった目もと。おびのつちは右手を胸に、左手をお腹にあてがうと、恭しく一札をして、横断歩道を小走りで渡る。

「気を取り直して行きましょう」

目が釘付けになっていった。青山さんに先を促され、やつこのことで右折を終える。おびのつちの姿は博物館の方へ消えていった。一方、私の頭はパンク寸前だ。おびのつちも夜遊びしてたのかしら、それはちよつと嫌だなあ：：。いや違う違う。それ以前の問題じゃないか。

「おや、由野さん。何か聞こえませんか？」

不意に青山さんが声をあげた。窓を開けて、首を車外に出している。耳を澄ますと、確かに遠くから、シュゴーという音が近づいてきた。それが段々と轟音になる。

「わっ、流れ星だ！」

美しい線を描きながら、眩しい光が降ってきた。お願い事を三回唱えて、と暢気に構えていた私だったが、その光がどんどんこちらに迫ってくるので、さすがに背筋が冷え始める。青山さんは素早く首を引っ込めると、真剣な顔をこちらに向けた。

「いいですか、落ちて聞いてください。：：小惑星がこっちに降ってきます」

突然のハリウツド的展開についていけず、「はあ」と間抜けに応じるしかない。その間にも轟音とまばゆい光は迫っていた。「早く！避けてください！」と肩を揺すぶられて、慌ててアクセルを踏み込む。タイヤがギャギャと甲高い音をたてて回りだした。小惑星は私たちの頭上を越えて、宇宙科学研究所の方へ落ちていく。色とりどりの光が、雨のように降り注いだ。

ああ、世界の終わりはこんなにも美しいんだ。視界が真っ白になる。思わず目をつむった。

轟音から一転しての静寂。地獄に仏のドライブが、あの世行きのドライブになるなんて：：。

おかしいな、普通に息が吸えているぞ。

そろそろと目を開ける。隣の青山さんは窓から身を乗り出して後ろを見ていた。丸い目は見開かれて、けれども輝いている。「見てください、由野さん。ハヤブサでしたよ」

振り向くと、宇宙科学研究所の辺りからカラスくらいの黒い鳥が数羽、飛び立つところだった。ハヤブサって、そのハヤブサ？ あの『はやぶさ』じゃなくて？

「ハヤブサは獲物を見つけるともの凄いスピードで急降下しますからね。いやあ、良いものが見られましたよ。これも醍醐味だなあ」

青山さんは一人で頷きながら座席に座り直した。私の頭の中を、小惑星と探査機と鳥が、ぐるぐる巡っていた。

私たちは淵野辺駅前の通りを走っていた。先のハヤブサ襲撃を乗り越えて、次は鹿沼公園に向かうところであった。「まだ時間がありますからね」と誘われて、思いついたのが鹿沼公園だったのだ。春先は、よく家族で園内を散歩した。

駅前はいつもの人が多い。それも今は静まり返っていた。安心半分、物足りなさ半分の心地で町並みを眺める。青山さんの指示に従って左折すると、公園に突き当たった。街路灯に照らされて、暗闇に木々の緑が浮かんでいる。

「昼間に散策すると楽しいんですけどね」

今夜は外から見るだけだ、と思っていると、俄に周囲が暗くなる。何か街路灯の明りを遮って、車に影を落としているようだった。

「？」

青山さんと顔を見合わせる。そっと窓から頭上を確認してみた。

のっそりと……。

大きな……五階建てくらいの大きさの男が……公園の木々に囲まれて立っていた。

「え……」

今晩は摩訶不思議なことがあり過ぎて、もう多少のことでは驚くまいと高を括っていたが、いやはやこの世は人智を越えた事象で溢れているらしい。

「デiraボッチですよ！ わお！」

何故か青山さんは興奮したように叫んだ。そうそう、この池はデiraボッチの足跡から出来たという伝説があつて……いや、今そんな豆知識はどうでもいいのだ。

ほぼ真下に停車する私たちには、巨人の表情が窺えない。固唾を呑んで控えていると、ゆっくりと、その巨体が動いた。

ズシン！

ただの一步で辺りが揺れた。車が左右にガタタ、と震える。その地鳴りに驚いたのか、公園の池にいる白鳥たちが一斉に飛び立つ。なんてことだ。公園のシンボルが……。

ズシン！

またデイラボッチが足を踏み出す。今度は公園の入口からゴーカ  
ートたちが飛び出してきた。蜘蛛の子を散らすように逃げていく。  
「ああ、子どもたちの人気者が……。何がしたいんですかね、この  
人は」

恐怖よりも疑念が勝ってきて、私は巨人を睨み上げた。

「お散歩にでも行きたいんじゃないでしょうか」

私たちは路肩に停車して彼の動きを見守っていた。ズシンズシン  
と足を動かし……。  
こつちに向かってくる。

「えっ」

大きくなる地鳴りに体を揺さぶられながら、こちらに下ろされる  
足の裏を呆然と見つめていた。土の付いた踵が、ゆっくりと、私た  
ちの、頭上に迫る……。  
「わーっ、由野さん、発進発進！」

ギアはドライブ、ハンドブレーキを解除！ 考えるより先に体が  
動いていた。今の今まで車が停まっていた所に、巨人の太い足が下  
ろされる。危機一髪。  
だが間髪を入れず次の一步が振り下ろされる。

「由野さん、右にハンドル！」

「はいっ」

「次は左へ！」

「はいっ」

右へ左へ、素早く蛇行しながら降ってくる足を回避する。子ども  
の頃、こういうカーレースのゲームで遊んだっけ。今ならドリフト  
も決められそう。唇をペロリと舐めた私だったが、仮免許にそんな  
技術があるわけもなく。次の瞬間、車は盛大にスピンしていた。

「もー駄目！」

「大丈夫、最悪エアバッグがあります！」

青山さんの、無意味としか思えない慰めが、遠くに聞こえた。  
ズシン！

ああ、私たち、アルミ缶みたいに潰されちゃったのかしら……。  
顔を覆った掌を、そっと除けてみる。フロントガラスの向こうに、  
象のそれより十倍ほど大きい足があった。巨人は私たちのことなど  
気にも留めていないように、ずんずん歩いていく。

「……私たちが普段、地べたの阿里さんを気にしていないのと、同  
じですね」

青山さんと二人、命のありがたみをしみじみ噛みしめた。

「ところで、デイラボッチさんはどこへ行くんですしよう」

だいぶ遠くなっても頭一つ抜け出ている姿。その行き先を不思議  
に思うと、青山さんがグローブボックスから地図を取り出した。

「ふうむ。市役所の方へ行くみたいですね。……お花見かな？」  
「やだな、先生。今は六月ですよ。通りの桜はとつくに散ってます」  
しかし青山さんの顔つきは思いのほか真剣だった。口もとにはいつもの優しい笑みが漂っているけれど、真っ直ぐな視線がこちらを貫く。

「それはあなたが望むか否かの問題ですよ」

脳裏に、春先に見た桜並木がよぎった。あの時は母の運転する車に乗って、後部座席の私は散る花をぼんやり目で追っていた。手を伸ばせば、花房と握手が交わせそうなほどに、咲きほこる桜。

運転席から見える景色は、また違うのだろうか。

その景色を、私も見てみたい。

ぐっと前を見据えて、車を出した。夜の町を静かに縫っていく。流れる町並みを横目で追いながら、気づけば私の心は躍っていた。

「異星人は、私の中にもいたみたいですよ」

「いつか零した愚痴を拭うつもりで呟くと、青山さんは  
「いや、私ははじめから知っていましたよ」  
と目を細めた。」

『横山二丁目』を右折して、市役所前のさくら通りへ入る。

高まる鼓動。視界が開ける。

そこに、春があった。

どこまでも続く桜のトンネル。下からライトアップされた白い花は、地上に溜まった星屑のよう。優しい風が房を揺すぶる度に幾千もの花びらが舞い上がって、黒い宙に波紋を残す。

「ああ、紫陽花も咲いている……」

ふと見ると、桜の根元に植わる紫陽花が淡く輝いていた。その綿飴じみた花は、今が何月なのかを厳然と示している。この世のものとは思えない光景に、息も忘れて見入っていると、青山さんが私を小突いた。

「運転をおざなりにしないでよ」

それで我に返り、身を起こしてハンドルを操作する。けれど、ああ。なんて美しい春が、ここにあるのだろうか。それを自分で拝みに来られることの、なんと幸福だろう。

「あ、デイラボッチさんがいましたよ」

木々の合間から、巨人の下半身が覗いていた。彼もまた、季節外の桜を楽しんでいるのだろうか。遙か上から望むさくら通りは、彼の目にどう映っているのだろうか。

白鳥が長い羽を広げながら木々の間を通り抜けた。空からは、ハヤブサの光が流星群のように降り注ぐ。光は地上に触れる瞬間、鳥

に形を変えて、四方に弾けた。青山さんが窓を開けて、降り積もる花びらを手に遊ぶ。写真に撮るなんてことが、野暮に思えるほど。走っていくと、通りの左右に赤と青の手が現れた。高名な芸術家が作ったオブジェだ。今にもその手を伸ばしてきそうな造形。彩度の高い赤と青が、宵闇でも鮮やかだった。

「：：手招きしてますね」

よく見ると、手首の方からおいでをするように動かしている。極彩色の花が右に左に揺れる様は幻想的でもあり、少し怖くもある。別の世界に誘われてしまいそうだ。そんな不安を、青山さんはカラカラと一笑した。

「幸運を呼んでいるんですよ。この町に、皆に、幸せが満ちるように」

一つ手が招くと、宙から光が降ってくる。その疾風は桜に届く前に優しいそよ風になって、小さな花と戯れる。弾けた光は町中に飛んでいく。デイラボッチの足音は、眠りにつく町をあやすように、規則正しく響いていた。

「このままずっと、この道を行きたいですね」

心の底から願うけれど。もう三〇メートルも行くと、桜並木は途切れていた。そろそろ右折して、この通りを抜けなければ。

「ドライブにはいつか終わりが来ますから」

青山さんの静かな宣告に気落ちして、そんな自分が可笑しくもある。あんなに運転が嫌だったのに、ドライブの終わりが惜しいなんて。

「けれどあなたが望めばまたドライブは始められます。この町の、どこにだって行けるようになりますよ」

一瞬だけ目線を横にやっけて、安全のためすぐに前を向く。ほんの一瞬、視界に捉えたただけであっても、私の心を照らすのに充分すぎるくらい、温かい笑顔であった。

「オートマ三九号車の方」

片手に握った配車券を見ると、そこには『AT39』の文字。呼ばれているのは私だ、と声の元へ駆け寄る。丸々と小柄なシルエツト。青山さんか。良かった、今日は是非ともこの人に担当してもらいたかったのだ。

青山さんは私の姿を認めると、いつものように相好を崩した。

「こんにちは、由野さん。良いお天気ですね」

「はい。絶好のドライブ日和です」

おや、と青山さんが片眉を上げる。それもその筈。先日会った時は運転が嫌で嫌で仕方ないといった顔つきをしていたのだから。心

情の変化を訝しむのも当然だ。

「昨日、変な夢を見たんです。教習の夢だったんですけど、町がへんてこなんですよ。でも、その中を駆け抜けるのが楽しくて」

シートベルトを締めながら、車のデイスコと化した一六号、横断歩道を渡るおびのつち、降ってくるハヤブサ：：などなどの話をする。青山さんは、身を振って面白がった。

「いや、実にすてきな夢ですね」

「早く、本物の桜並木を走ってみたいんです」

「桜の時期に教習が当たると、見られる生徒さんもいるんですけどね。もう六月ですから。お楽しみは来年に持ち越しですね」

「待ち遠しいです。その頃には、町中に遊びに行けるようになってるかなあ」

瞼を閉じると、あの景色が蘇る。夢は徐々におぼろになっていくけれど、現実の景色がそれを上塗りしていくだろう。意気込む私をからかうでもなく、青山さんはただ背を押してくれた。

「：：それじゃ、さっそく出発しましょうか」

その声に頷いて、ハンドブレーキを下ろそうと手を伸ばす。

「あれ？」

見ると、そこに白っぽい欠片が落ちていた。ごみだろうか、とつまみ上げて目の高さに掲げる。フロントから差し込む光に透けるそれは、桜の花びらであった。

息を呑む私の手から、青山さんがそつと花びらを引き取る。

「おや、まだこんなものが残っていましたか」

春の名残は窓から外に躍り出て、梅雨の青空に舞い上がっていった。